

◆プロローグ

暗がりにごめく囚人たち。闇を切り裂き響く、看守の号令。
整列し労働を開始する囚人たち。

M1 我ら罪深き神の僕

◆第一節

ふたつの房に分かれて、休息を摂る囚人たち。
ひとつの房が盛り上がっている。

マリネ「つまりその男は恋人にたぶらかされて、七つの海を航海したはいいけれど、結局お宝を手にすることは出来ずに、しがない貧乏海賊に逆戻りってわけです。これが本当の後悔（航海）先に立たずってやつですね（笑）」

囚人1「（笑）いやあ、面白しれえ野郎だな。それで、それからどうなったんだよ？」

マリネ「それからですか？まあ、金の切れ目が縁の切れ目ってやつでして、元々は自分勝手な風来坊の集まりでしたからね。一時は沈没船から金貨が流れ着く島のニュースを聞いて新たな船出も考えましたが、結局は三々五々、散り散りのバラバラです。♪ちりぢりーのバーバラ（笑）」

囚人2「（笑）まったく間抜けな船長だな。なんてやつなんだ？その間抜けな貧乏海賊は？」

マリネ「そいつですか？そいつの名前はですね」

スカイ「うつるせーな！静かにしろってんだ、この野郎！眠れねーじゃねえか！べらべらべらべら、くだらねえ話をいつまでも」

囚人3「なんだ、てめえ？えらそうに」

囚人4「出てこいよ。そんなに眠たけりゃな、一生起きれねえようにしてやるうか？（笑）」

マリネ「まあまあ、皆さん、そんなにいきり立たないで。狭い牢獄で争ってもいいことなんてひとつもありませんよ。仲良くやりましょう、仲良く」

眠りを邪魔され、怒りながら房から出て来るスカイ。

スカイ「何が仲良くだ！だいたいさつきからてめえのその慥懃無礼な腰ぎんちゃく丸出しのしゃべり方が耳についてイライラすんだっつーの！そんなに人に笑われてえならな、いつそサーカスにでも行ってピエロになつちまえ・・・ピエロ・・・お前！？」

バンジー「助けてくれー!!」

大騒ぎで房から飛び出てくるバンジー。

スカイ「うわ、また始まった!しっかりしろ!落ち着け!

バンジー「やめてくれー!許してくれー!そんなことしたら死んじゃうー!だめだめだめだめ!それだけはやめて!お願いします!ダンス様ー!!」

気絶するバンジー。

スカイ「おい、しっかりしろ!目を覚ませ」

囚人1「なんだ、そいつは?頭でもおかしいのか?」

スカイ「そうじゃない、ときどき恐ろしい夢にうなされてこうなっちゃうんだ」

囚人2「寝ぼけたってことか?」

スカイ「ああ、そうだ」

囚人3「ダンス様ってなんだ?そんなに恐ろしい奴なのか?」

スカイ「・・・世界一、恐ろしい・・・」

囚人4「世界一・・・」

囚人5「恐ろしい・・・」

バンジー「・・・ううん・・・あれ?どこだここは?」

スカイ「目が覚めたな、大丈夫か?」

マリネ「バンジー!?!」

バンジー「ん?・・・ああ!お前誰だっけ?」

ずっこけるマリネ。

マリネ「私ですよ、マリネです。ピエロのマリネ。忘れちゃったのですか!?!」

バンジー「・・・おー、お前か!考古学者のキースの手下だった道化師だ。あれから何してたんだよ?お前も捕まっちゃったのか?しょうがねえなあ(笑)」

マリネ「自分こそ捕まってしまったんですか?天下の海賊ホエル族の末裔、バンジー船長ともあろうお方が」

バンジー「まあな、ちよつくらしくじっちゃってよ。それもこれも」

スカイ「ダンスにはめられたんだよ」

マリネ「はめられた?」

バンジー「ああ・・・あいつ、こともあろうに恋人の俺様を騙しやがった」

マリネ「何があったんですか?」

スカイ「沈没船の金貨の話は覚えてるか？」

マリネ「はい。南の島に大量の金貨が流れ着いた件ですよね？行ったんですか？
てつきりみんなあきらめたと思っていました」

バンジー「一旦は立ち消えになったんだが、しばらくしてダンスが相談してき
た。船を出してくれないかってね」

スカイ「またまた色仕掛けにやられて、バンジー船長は船を出した」

バンジー「ふん・・・ままとお宝を手にしたと思ったんだが、あのやろう、
一人占めして持ち逃げした上に俺たちを売りやがった」

スカイ「船に穴をあけて俺たちを足止めして、自分はトンズラ。逃げ遅れた俺
たちは、財宝を守っていたカルデラ王国の警備軍に逮捕されたってわけ。国宝
を盗んだ罪でね」

マリネ「それは大変でしたね。お悔やみ申し上げます」

バンジー「裏でギラギラが糸引いてた」

マリネ「ギラギラ？あの金に目が無い守銭奴のギラギラが！？」

スカイ「あのやろう、今度会ったらただじゃおかねえ」

マリネ「おー、こわい。私はなるべく関係したくありませんね」

スカイ「そうはいくかよ、お前も立派なホエール号の乗組員だろう？」

マリネ「いえ、私は別に・・・」

バンジー「お前の方はどうしてこんなところにいるんだよ？」

マリネ「私ですか？私の話は・・・結構です」

スカイ「教えろよ」

バンジー「ペテンで年寄りでも騙したのか？」

マリネ「何を馬鹿な事を。私のは・・・冤罪です」

スカイ「冤罪？」

バンジー「やってねえってことか？」

スカイ「なんの濡れ衣だよ？」

マリネ「・・・人殺しです」

バンジー「スカイ「人殺し！？」」

◆第二節

揃って体操をする囚人たち。

M2 朝に集え邪悪な羊飼いや

食事の支度をする囚人たち。

そこに看守が新しい囚人を連れてくる。

看守「新入りだ。面倒みてやれ」

囚人1「へーい」

囚人2「そんなところに突っ立ってねえで、こっち来て食べよ」

アボカド「・・・」

囚人3「どうしたんだよ？食べねえのか？」

アボカド「これだけ？夕飯これだけ？」

囚人4「文句言うなよ、食べるだけありがてえってもんだろ」

アボカド「あー！！」

囚人5「なんだよ？びっくりするじゃねえか」

アボカド「タコだ、タコが入ってる」

囚人1「なんだよ？お前。タコだめなのか？」

アボカド「おいらタコだけは駄目なの。タコは悪魔の化身だから食っちゃ駄目だって、死んだ婆ちゃんがいつも言ってたんだ」

看守「なんだ？貴様、食事に文句を言ってるのか？けしからんやつだ！かまわん、無理やりにも食わせてやれ！ほら、早くしろ！早くせんと懲罰房にぶち込むぞ！」

囚人2「懲罰房！ひー、やります、やります！お前ら、そっち押さえろ！」

囚人3「わかった。さあ、食べ！」

囚人4「食わないとこっちまでひどい目にあわされちまう」

囚人5「ほら、食べたたら食べ！」

アボカド「やめて・・・んぐっ・・・やめてくれ・・・ちきしょう、腹が減って力が出ない（下を向く）」

バンジー「おいおい、弱い者いじめはやめてやれよ」

スカイ「新入り、大丈夫か？タコが食べなくても罪にはならないぜ」

マリネ「お腹がすいてるんですね。何か食べたいものはありますか？」

アボカド「肉・・・お肉が食べたい」

看守「貴様、口を出すんじゃない。余計な事をするや貴様も懲罰房行きだぞ？」

バンジー「懲罰房？いいね、どんなところなんだ？その懲罰房ってのは？超バツグンな宿坊ってことか？」

囚人1「やめとけ、船長さん」

囚人2「看守には逆らうな。懲罰房なんか行ったら・・・生きて帰れねえぞ」

看守「どうした？怖気づいたか？まあ、いい。今日のところは勘弁してやる。今日は新月だからな、魔女の魔法が飛び交う夜だ。早いところ帰るとしよう。だがいいか？調子に乗っていると後悔するぞ」

去っていく看守。

スカイ「ふん！えらそうに」

バンジー「魔法の魔法？新月の夜に何かあるのかな？」

囚人3「知らないかよ？」

バンジー「知らない。いったいなんだ？」

囚人4「それがよ、このあたりに古くから伝わる伝説で、新月の夜は魔女がホウキに乗って飛び回るらしいんだ」

囚人5「なんでも、新月の夜は真っ暗闇で、尚且つ引力が強くなり、月の力に引き寄せられて、魔女も空を飛びやすいとかなんとか」

囚人1「よくは分からないが、良からぬ魔法の力が夜空を覆うんだってよ」

バンジー「良からぬ力か・・・それで？」

囚人2「なんでも生贄を探して回るらしいぜ」

囚人3「魔法の好物は人間の心臓だそうだからな。ひひひ」

バンジー「なるほどな・・・よし、わかった。それじゃあ少しばかり、その良からぬ力ってやつを借りるとするか」

スカイ「力を借りるって、何をしようって言うんですか？」

バンジー「決まってるんだろ？脱獄だよ」

みんな「脱獄!？」

バンジー「ぼっ！声がでけえよ。いいか？良からぬ力ってことはだ、俺たち罪人側の力ってことだろ？」

マリネ「なるほど。たしかにそうですね。つまりその良からぬ力に乗じて、ここから脱獄しようって寸法ですね？」

バンジー「ああ。良からぬ力が俺たちにとって、吉と出るか凶と出るかは分からないが、逃げるなら今日しかない。そんな気がしてならねえ」

囚人4「俺たちも連れてってくれ」

囚人5「こいつはどうする？」

バンジー「あ、忘れてた。おい、お前、大丈夫か？とにかく食べ。タコでもイカでも食ってここから出られたら、好きなだけ肉でも魚でも食ったらいい」

アボカド「おいら、食べる。こんなところさっさと出たいもん」

スカイ「お前はいったい何して捕まったんだ」

アボカド「食い逃げ」

みんな「だろうな」

マリネ「たしか昔もいましたね、似た方が、ホエール号に」

スカイ「いたいた、好きなもの食いたいがために、ホエール号のコック長になった食いしん坊が」

バンジー「まんまるい顔してよ」

スカイ「食材だけにはうるさくてな」

マリネ「笑うとスナメリそっくりで・・・」

3人「アボカド！」

アボカド「おいらアボカド。なんでおいらの名前知ってるの？」

マリネ「覚えてないんですか？ホエール号！ほらこの人、海賊バンジー！バンジー船長ですよ！」

アボカド「んん？・・・あ、思い出した！酒場で喧嘩して、仲良くなって、おいらを船に乗せてくれたバンジーさんだ！」

スカイ「元気だったかよ？懐かしいな？今まで何してたんだ？ふらつといなくなっちまって心配してたんだぞ？しかし食い逃げとは相変わらずお粗末なやつだな（笑）」

アボカド「あんた誰？」

スカイ「だー！！俺を忘れるとは何事だ！？ホエール号の甲板長スカイ様だぞ！？散々一緒に戦っただろうが！？まったくうすら馬鹿は変わんねえな！てめーの脳みそは馬糞ウニか！？」

アボカド「ウニ！？ウニ大好き！ウニってトゲトゲだけど味はトロトロだよ。甘くて苦くてしょっぱくて、まるで海そのもの。生で食べるなら白ワインがいいね。ロいっばいに広がる芳醇な香りに目を閉じればまるでそこは地中海！生クリームと合わせてイクラを添えたソースにすれば、白身魚を引き立てて、噛めば噛むほど至福の時間は無限にさえ感じるのさ！」

スカイ「間違いない、アボカドだ・・・」

バンジー「（笑）こりゃいい、昔の仲間が勢揃いってわけか？」

マリネ「海賊バンジーと6人の愚か者ですか？」

バンジー「ああ、あいにくダンスとギラギラには裏切られちゃったが、どうやらこれで船が出せそうじゃねえか？」

アボカド「え？また船に乗れるの？」

スカイ「うまくここから逃げ出せたらな」

アボカド「ホエール号に乗るの？あ、ロコ爺さんはどうしてるの？元気なの？」

バンジー「爺さんは死んだ。3年前にな」

マリネ「そうだったのですね。死因は？」

バンジー「相変わらずのデブが災いして、サメに食われちゃった」

アボカド「サメに食われた！？」

バンジー「また船の便所の床が抜けて、今度は海に落ちた。そこに人食いざめが大きな口を開けて待ってたわけよ。骨ひとつ残らずにきれいさっぱりいなくなっちゃった」

スカイ「生前、死んだら海に散骨してくれって言ってたから手間は省けたな」

マリネ「・・・」

バンジー「どうした、マリネ？」

マリネ「いえ、なんとか泣こうとしましたが、いっこうに涙が出ませんでした」

バンジー「フツ、まあ所詮、誰だって死んじまうんだからよ、今さら嘆いた

って仕方ねえ。まずは今日をどう生き延びるかだ。だがな、こんな所で死ぬのだけは、ご免こうむるぜ」

スカイ「それで？どうやって逃げ出すんですか？」

バンジー「簡単だよ。魔女を呼び出すのさ」

磔にされているアボカド。火をつけられそうになっている。

アボカド「やめてー！やだよー！なんでこんなことするのさ！？昔の仲間にあんまりじゃないか！？」

バンジー「大人しくしろ、魔女を呼び出すためだ」

アボカド「だから、どうしておいらなの！？」

バンジー「馬鹿だなあ、生贄なんだから出来るだけおいしそうな方が魔女だっ
ていいだろう？その方が魔女を呼び出しやすいに決まってる。俺ってあつたま
いいー！」

マリネ「しかし、本当に来ますかね？」

バンジー「来るさ。いや、来させてみせる。よし、火をつけろ」

アボカド「うわー、タンマタンマ！ちよつと待っておくれよー！」

スカイ「悪く思うなよ。仲間のためだ、恨んで出てきたりするなよ」

アボカド「恨むー、ぜったい恨むー」

バンジー「この古文書が役に立つ日が来るとはな」

スカイ「それは！」

バンジー「ああ、ロコ爺さんから受け継いだ、ホエール族に伝わる古文書さ。
捕まった時、見つからないように隠しておいたんだ。見てみる、ここに魔女を
呼び出すための呪文が書いてある」

スカイ「ふんふん」

バンジー「さあ、始めるとするか」

マリネ「(ぎくり)」

バンジー「暗黒と恐怖の名のもとに、月が太陽を滅ぼす時、美しき残虐と尊き
殺戮をもつて世界を黒き光に染めよ。名もなき屍は蘇り、飢えた狼たちは心の
臓を喰らうだろう。出でよ、悠久の破壊者よ！謳え、永遠の蛮人、血塗られた
女王よ！」

その時突如、風が吹きあれ魔女の笑い声が響き渡る。

スカイ「来た！魔女だ！魔女が現れたぞ！」

バンジー「おいでなすったか」

マリネ「ひえー、魔女様、生贄はこちらです！どうか間違えて私の心臓をお食

べにならないでください！アーメン！」

アボカド「マリネ、てめー！」

聞きつけた看守が現れる。

看守「貴様たち、何をしている！？なんだ、この風は！？やめろ！やめないか！？」

魔女が手下を連れて現れる。(人間には見えていない)

M 3 黒い光

バンジー「さあ魔女様、俺たちをここから逃がしてくれ！生贄はこれだ。好きにしていぜ！」

響きわたる魔女の笑い声。

魔女が魔力で牢獄を破壊し始める。

看守「やめろ！やめないか！」

魔女の気配に向かっていき、返り討ちにあい気絶する看守。
立ち去る魔女たち。

火の手が上がり、大騒ぎになる牢獄。飛び交う怒号。

スカイ「チャンスだ！バンジー、今のうちに逃げよう！」

バンジー「よし！みんな、行くぞ！」

逃げ出すバンジーたち。

アボカド「ちよっと、待って待って！おいら置いてくなー！」

しかたなく戻ってくるマリネと囚人たち。

縛られたままのアボカドをみんなで運んでいく。

◆第三節

酒場。無事に脱獄したことに乾杯する面々。

スカイ「船が残っていて助かりましたね」

バンジー「ああ、修理もされてラッキーラッキー！」

マリネ「しかし一時はどうなるかと思いましたよ」

バンジー「あんなにうまく行くとはな、見たか？あの看守の顔！」

マリネ「はいはい、見ましたとも。溜飲が下がりましたねえ、気持ちよかったです」

アボカド「気持ちよくなんかないよ！もうちょっとで殺されるところだったんだから！」

バンジー「わりいわりい、でもよ、ちゃんと最後は助ける計画だったぜ」

アボカド「うそつけ！置いてったじゃん！」

スカイ「(笑) まあまあ、いいじゃないか、こうしてまたポテトも食えるんだからよ」

アボカド「そんなんじやだまされない・・・ぞ・・・いい匂い・・・おいし・・・美味しい！（むしゃむしゃ）」

バンジー「他の連中もうまく逃げたかな？」

マリネ「大丈夫でしょう。国にかえったら悪事からは足を洗って、真っ当にいきるんだって言ってましたよ」

バンジー「それがいい。良からぬ力なんて無い方が身の為ってもんだ」

スカイ「良からぬ力と言えば、魔女はなぜアボカドに見向きもしなかったんだろうな？」

マリネ「たしかに、はなから我々を逃がすことだけが目的だったような暴れっぷりでしたね」

バンジー「もしかして、俺様の事が好きになっちゃったのかな？」

ダンス「誰が誰を好きになったですって？」

4人「ダンス！？」

いつの間に現れたダンス。

スカイ「てめえ、よくもぬけぬけと」

バンジー「待て、スカイ。よう、ダンス、久しぶり、でもないか？どうだ？たんまり一人占めた金貨を毎晩抱きしめて、ギラギラと楽しくやってるのか？お前たちのお蔭で俺とスカイも楽しい別荘暮らしが出来たぜ。でもな、お前には感謝してる。こうしてまた仲間とも再会できたしな。まさか再会の場所が牢獄とは思わなかったけどな(笑)」

剣を抜き、ダンスに突きつけるバンジー。

バンジー「そこで相談だ。お前が持つてる残りの金貨、全部俺に寄こしな。そうすればこれまでのことはなかったことにしてやる。断れば、今この場でのを掻っ切る。いくら元、恋人のお前だとしてもな。どうする？」

ダンス「・・・ごめんさい、バンジー・・・私は嫌だったのよ、でもギリギリがどうしてもやれって」

バンジー「断りやよかっただろう、あんなウソツキ野郎のいう事なんてよ」

ダンス「出来ればそうしたわよ。でもこれにはわけがあって・・・」

バンジー「どんなわけだよ？」

ダンス「実は・・・あなたと住むマイホームを、あなたに内緒で買っちゃったの。だけど支払いが出来なくて、仕方なく・・・。私、あなたと住む家を手放したくなくて、それで彼の話に乗っちゃったの。許して、でも信じて、私は今でもあなたと暮らすことをあきらめていないのよ？ねえ、信じてくれる？」

バンジー「・・・ん、信じろたって、お前、実際俺を騙して・・・」

スカイ「バンジー、何ぐらついてんだよ！こんな女のいう事、嘘に決まってるだろ！騙されるな！」

ダンス「うるさいわね、だまってな、下っ端！」

スカイ「下っ端！・・・」

バンジー「だけだよ、船はどうなんだよ、船は！？船底に穴開けて、俺を警備軍に売りやがったろう！？」

ダンス「それはギリギリの仕業。私は泣く泣く逃げたのよ」

バンジー「そういうことなら、一度くらい会いに来ても良さそうなんだろう？それに、金貨はどうしたんだよ？」

ダンス「お金はギリギリに一人占めさつれちゃったの。だからあなたに合わせる顔が無くて会いに行けなかったのよ」

バンジー「そうなのか？・・・本当に？」

マリネ「単純ですね」

アボカド「なおらん病気だね」

ダンス「本当よ、信じて」

バンジー「・・・そうか、じゃあ・・・許す！」

ダンス「本当？バンジー！嬉しい！（抱きつく）」

スカイ「振出しに戻るか」

マリネ「それで、今夜はなぜここに？まるで私たちが来るのを知っていたかのようですね？」

ダンス「何言ってるの？偶然よ、偶然。実はね、いい話があるの」

スカイ「出た！このパターンの時は絶対やばい話なんだから、みんな耳ふさげ」

みんな耳をふさぐ。それをいちいち取っていくダンス。

ダンス「魔法の宝石箱って聞いたことない？」

バンジー「魔法の宝石箱？」

マリネ「さあ、知りませんね」

スカイ「それがどうしたって言うんだ？」

ダンス「なんでも、絶海の孤島、ウィッチアイランドには魔法が住んでいるらしいの。その魔法は黒魔法と呼ばれる恐ろしい魔法で、名前はベロニカ。彼女を見た物はあまりの美しさに命を吸い取られるとも言われているわ」

アボカド「怖いなあ」

ダンス「その彼女が何よりも大切にしているもの、それが魔法の宝石箱」

バンジー「ふーん」

ダンス「ううん！海賊として血が騒がない？」

バンジー「別に」

ダンス「じゃあこれならどう？その宝石箱は、蓋を開けるたびに宝石があふれ出てくる」

スカイ「なんだって！？」

マリネ「つまり無限にお宝があふれてくるわけですか！？」

ダンス「ええ」

アボカド「無限にポテトならいいのにな」

ダンス「チッ！とにかく、この宝石箱を盗むことが出来れば、一生働かないで暮らしていけるわよ。ううん、世界征服だって夢じゃないわ」

マリネ「世界はいりませんが、不労所得は魅力的ですね」

スカイ「けどどこにあるんだよ？そのウィッチアイランドは」

ダンス「新月の夜、目の見えないはずの黒い鳥たちが一斉に向かう島があるらしいの。その鳥たちを追っていけば、島にたどり着けるはず。ウィッチアイランドに」

バンジー「ふふふ・・・ふあははははは！」

マリネ「どうしました！？バンジーさん？」

バンジー「ウィッチアイランドか、おもしれえ！その話、乗ってやるよ」

ダンス「バンジー！」

バンジー「良からぬ魔法の力、とくと見せてもらおうじゃないか」

乾杯をして出航を誓う面々。

M 4 海賊バンジーのテーマ

大海原を進むホエール号。

甲板で働くスカイ。料理を作るアボカド。芸の練習をするマリネ。

新月の夜、黒い鳥の群れを追い、ウィッチアイランドを目指す。

◆第四節

ウィッチアイランドに上陸したバンジーたち。

バンジー「ここがウィッチアイランドか」

マリネ「なんだか薄気味悪い島ですね」

スカイ「本当にこんなところに魔女がいるのか？」

ダンス「こんなところだからいるんじゃない」

アボカド「お腹すいたな・・・あ、これ食べられるかな？」

バンジー「馬鹿、腹壊すぞ」

スカイ「おい、あれ！」

宝石箱が置かれている。

ダンス「本当にあった・・・見つけたわ、魔女の宝石箱よ！」

マリネ「ずいぶん簡単に見つかりましたね」

バンジー「ついてるな」

スカイ「開けてみるか？」

バンジー「よし、お前やれ」

アボカド「またおいら！？なんでこういうことばかり(ぶつぶつ)」

警戒しつつ宝石箱に近づくアボカド。

アボカド「じゃあ開けるよ。せーの」

中身は空っぽ。オルゴールの音だけが静かに流れる。

アボカド「あれれ？空っぽだ」

マリネ「何も起こりませんね」

ダンス「ちよつと・・・嘘・・・どういうことよ」

バンジー「またまたやられちゃったかな？」

手下を従がえて現れる黒魔女のベロニカ。後方にキラキラがいる。囲まれるバンジーたち。

ベロニカ「ようこそ、ウィッチアイランドへ」

マリネ「ひえー、出た！魔女！」

バンジー「わーすげえ、本物の魔女だ！始めて見たけど、ワクワクするなあ」

ベロニカ「それは光栄だわ。私は黒魔女のベロニカ。どう？魔女の印象は？」

バンジー「最高だぜ、良からぬ力だっけ？超絶イカしてる」

ベロニカ「ありがとう、うれしいわ」

ギラギラ「申し訳ございません。わざわざ来ていただいて」

スカイ「ギラギラ！またお前か！」

ギラギラ「はい。また私です」

ダンス「ギラギラ、どういう事よ！？どうして宝石箱の中身が空っぽなの！？話がちが」

スカイ「なに！？」

ダンス「あ、いえ・・・そうじゃなくて」

バンジー「いいんだぜ、ダンス。お前が嘘をついてるのは最初からわかった。ただ俺は本物の魔女って言うやつに会ってみたかっただけ。それに、魔女の宝石箱ってやつもな」

ギラギラ「バンジー船長らしいですね。大いなる好奇心、誰にも勝る勇気と冒険心、だがあなたには決定的に足りないものがある。何かお分かりですか？」

バンジー「なんだろうな？背かな」

ギラギラ「それは私！（咳払い）・・・あなたに足りないのは、知恵。洞察力と言ってもいい。勢いだけで生きている。いいですか？バンジーさん。それでは命がいくつあっても足りませんよ」

バンジー「はん、命が惜しくて海賊が出来るかっての。てめえみてえに頭でっかちに生きてるより、勢いだけで生きてるほうが、断然面白いんだよ！」

戦闘が始まる。

負けて取り押さえられるバンジーたち。

ベロニカ「どう？気がすんだ？」

バンジー「うるせえ！さっさと殺せ！」

ベロニカ「そう怒らないでちょうだい。カルデラ王国の牢獄から助けてあげた恩を忘れないで頂戴」

スカイ「あれはあんただったのか」

マリネ「なるほど、我々をここに来させるために逃がしたのですね」

ベロニカ「ええ。どうしてもあなたの方が必要なの」

バンジー「俺の力？ふざけるな、魔女のお前が俺に頼る必要があるの？」

ベロニカ「あるのよ。あるから呼んだの。宝石箱を取り戻してちょうだい」
ダンス「なんですって?」

ギラギラ「説明不足でしたが、本物の魔女の宝石箱はここにはありません」
スカイ「なんだと!？」

アボカド「どういうこと?」

ギラギラ「魔女の宝石箱は、白魔女によって持ち去られたのです」

ダンス「ちよつとギラギラ!? バンジーたちを連れてきたら好きだけ宝石を取り出していいって!」

ギラギラ「まあまあ、本物を取り戻せたら好きにしてください」

ダンス「そんな」

スカイ「なんだ? お前も騙されたのか?」

ダンス「・・・ふん!」

マリネ「さては金貨の話も嘘ですね?」

バンジー「使っちゃったのか?」

ダンス「・・・10倍まで行ったのよ! でも最後のゲームで全部持ってかれて・・・」

マリネ「バカラですか?」

ダンス「ポーカー・・・」

スカイ「そりゃ無理だろ? あんたみたいに全部顔に出る奴がポーカーって」

ダンス「うるさい!」

ベロニカ「宝石箱を盗んだのは、白魔女よ」

バンジー「白魔女?」

ベロニカ「ええ。宝石箱は魔女の良からぬ力の源、なによりも大切なもの。それを白魔女は私から盗んだ。だから、あなたたちで取り戻して欲しいの」

スカイ「なんだって俺たちが」

アボカド「だいたいどこにいるのさ? その白魔女は」

ベロニカ「分からないわ」

スカイ「ふざけんな」

ベロニカ「それからもうひとつ」

バンジー「なんだ?」

ベロニカ「決して白魔女の前で宝石箱を開けてはならない。そして宝石箱を取りもどしたら・・・白魔女を殺して」

マリネ「きよえー! 出来るわけないでしょう! ? そんな恐ろしい事」

ダンス「自分でやりなさいよ! なんて私たちが」

ベロニカ「魔女は魔女を殺さない。魔女の世界の掟よ。魔女は魔女を殺すことは出来ない。そして魔女を殺すことが出来るのは、魔女を愛した人間だけよ」

スカイ「ちよつと待てよ、どこにいるかもわからないやつをどうやって殺せつ

ていうんだよ！？それに俺たちは殺しはやらない。そんな話、引き受けられるわけないだろう！？」

ベロニカ「引き受けるしかないのよ。ギラギラ、お前もね」

ギラギラ「え？私もですか！？ちよっとお待ちください、ベロニカ様！それで約束が違います！事がうまく運んだら、私を弟子にしてくれるはずじゃ」

ベロニカ「覚えているわ。ただし、全てが終わったらね。宝石箱を取り戻し、白魔女の命が尽きた時、約束は果たしましょう。それまではこの呪いによって、お前たちは使命を果たすしかないのよ」

人間たちに魔法をかけるベロニカ。

ベロニカ「テューラマジョーラ、ペロメソタルーナ、トエフモエーゼ、カンパーノゼジョーラ！」

みんな「うあー！」

頭や胸をかきむしり苦しむバンジーたち。

ベロニカ「10日以内に白魔女を見つけ出し殺せ。期日を過ぎた時、お前たちは己の一番忌み嫌う生き物に姿を変えるだろう。よいか、白魔女は魔女の顔をしていない。普通の人間たちにまぎれて、悟られぬよう暮らしている。己さえも欺きながら……。頼んだわよ、海賊バンジー。忘れないで、“魔女は魔女を殺さない。魔女を殺すことが出来るのは、魔女を愛した人間だけ”」

雷鳴と閃光の中、消えていくベロニカ。

我に返るバンジーたち。

スカイ「くっそ、頭がいてえ」

ダンス「は！ギラギラ、あんた！」

バンジー「やめろ、ダンス！いたたた、お前も同罪だろうが」

ダンス「でも！」

マリネ「でもじゃないですよ、ダンスさん！あなたって人は」

バンジー「ギラギラ、当てが外れちゃったな」

ギラギラ「ヒッ！すみません！私もやりたくはなかったのですが、魔女に脅されて」

アボカド「嘘つけ！あんたのせいで魔女の呪いをかけられちゃったんだぞ！どうしてくれるんだ！？」

ギラギラ「それは・・・申し訳ありません」

バンジー「こうなったら仕方ねえ、お前をどうするかはこの件が片付いてからだ。とりあえず、10日以内に白魔女を探し出さなくちゃな」

ダンス「何だか、楽しそうね」

バンジー「そうか？ だけどいったい何にされちまうんだろうな？ ダンスお前はなんだ？ 一番嫌いな生き物は」

ダンス「私？ 私は・・・ゴキブリよ」

バンジー「じゃあ、お前はゴキブリにされちまうわけだ(笑)」

ダンス「キヤー！！ やめて！」

バンジー「お前らは？」

スカイ「俺、豚」

アボカド「おいら、タコ」

バンジー「ギラギラ、お前は？」

ギラギラ「私ですか？・・・蛇です」

バンジー「ほんとか？ お前、メチャクチャ蛇っぽいぞ、ギラギラしてるし。俺はそうだな、ナマケモノかな、じっとしてらんないから(笑)、お前は？ マリネ」

マリネ「私は・・・むしろ、何か別の生き物に変えて欲しいです」

ダンス「どういうことよ？」

マリネ「もう、人間はいいです。この際、いつそやめてしまいたい」

スカイ「どうしたんだよ？ マリネ」

マリネ「私・・・人殺しの罪で牢獄に入れられたんです」

バンジー「そう言ってたな」

スカイ「冗談かと思ってたぜ」

マリネ「・・・死んだのは友達のパイロでした・・・皆さんと別れ旅に出た私は、路上の大道芸を生業に暮らしていました。ある街で私は彼と出会った。私たちは気が合い、ある頃から一緒に芸をするようになり、いつしかその町では評判のコンビになっていました。その日も私たちは路上で芸をしていた。ピストルの弾を口で受け止めると言う手品のような芸です。ところがその日、相棒めがけて撃った私の銃からは、本物の弾が飛び出し、相棒はあっけなく死んでしまいました。私は捕まった。相棒殺しの罪を問われて」

ダンス「どうしてそんなことに・・・」

マリネ「私はその日見ました。観客の中に、彼の昔の相棒がいたことを」

バンジー「どういうことだ？」

マリネ「彼らは以前とても人気のあるコンビだったんです。私と組む少し前まで。ところが新しいコンビで人気が出ていた私たちを、やつは妬んだ。そしてすり替えたのです、実弾の入った銃と」

スカイ「そんなことするくらいなら、どうして離れたりするんだ？」

マリネ「人は無くしてから気が付く生き物ですからね」

アボカド「言ったんでしょ？はめられたんだって」

マリネ「もちろん何度も言いました。ですが信じてもらえませんでした。実際、銃を撃つたのは私ですからね」

バンジー「それで？お前は何になりたいんだよ？」

マリネ「私は・・・イソギンチャクになりたい」

アボカド「なんで？」

マリネ「なんとなく・・・ただ、ゆらゆらと揺れてるだけなら、大切な人を失ったりはしないでしよう？」

バンジー「じゃあ、イソギンチャクになりたいって言うてみる」

マリネ「私は・・・イソギンチャクになりたい」

バンジー「もつとでかい声で」

マリネ「私は、イソギンチャクになりたい！私は、イソギンチャクになりたい！私は、イソギンチャクになりたい！！」

バンジー「よし、それでいい！いいか、マリネ、人間もイソギンチャクもたいして変わりやしねえよ。イソギンチャクだって悩んでるかもしれないねえぞ？どっちにしても俺たちには時間が無いんだ。船を出すぞ！」

みんな「アイアイサー！」

バンジー「お宝は横取りだ！」

みんな「アイアイサー！」

バンジー「宝石箱は俺のもんだ！」

みんな「アイアイサー！」

バンジー「いっちょ探しに行くか？白魔女さんをよ！？」

みんな「OK！バンジー！」

船に乗り白魔女を探す旅に出るバンジーたち。

M 5 海賊バンジーのテーマ

◆第五節

プンタアヒージョの港に上陸するバンジーたち。

バンジー「よし、あの港に停泊だ。錨を降ろせ！」

港の市場。たくさんの方の行商の女たち。行き交う人々たち。

アロマ「安いよ安いよ！買ってつておくれ！今朝とれたばかりの新鮮な魚だよ」
ワイン「こっちは野菜！真つ赤なパプリカに青々したズッキーニはいかが？エ
シヤロットは生がいいわよ」

マルゲリータ「ミルクとチーズにバターもあるわよ！こっちはチェダー、こ
っちは特製マスカルポーネ！ワインにパンに何でも合うわよ」

市場に来るバンジーたち。

バンジー「賑やかな街だな。いったいなんて街なんだ？」

スカイ「プンタアヒージョ、魚が豊富な港町です。少しばかり骨を休めまし
ょうか？」

アボカド「賛成！とりあえずお腹いっぱい食べようよ！」

バンジー「そうだな、宿はここにしよう。明日は朝から白魔女を探す。それ
でしばらく好きにしてくれ」

アボカド「やったー！まずはヒラメー！」

アロマの店に走っていくアボカド。

アボカド「ヒラメ下さい！」

アロマ「あら、可愛い。イルカ系の顔ね。じゃあ、アジカイワシはどう？」

アボカド「顔で決めないで」

ワイン「マリネにするなら玉ねぎがいるわよ」

マリネ「マリネ？」

マルゲリータ「ヤギの乳もあるわよ」

アボカド「ヤギ！？・・・メー」

アロマ「ほら、似てる！」

ワイン「本当！」

マルゲリータ「まるで」

3人「スナメリ！」

アボカド「ふん！」

スカイ「ははは、それじゃ俺はちよっくら酒場へ」

ダンス「私も行くわ」

スカイ「船長はどうします？」

バンジー「俺は宿で昼寝でもするわ。昨日もワッチで眠ってないからな。張り
切りすぎるなよ」

スカイ「わかってまーす！それじゃ」

バンジー「お前は？」

ギラギラ「私は少し調べてきます。魔女の噂が無いか。蛇にはなりたくありませんからね」

バンジー「しつかりな。今度裏切ったら」

ギラギラ「わかってますよ・・・それでは」

バンジー「オ・ラ！部屋あるかい？」

宿に入っていくバンジー。

更に食材を求めて移動するアボカド。

取り残されたマリネ。

マリネ「さてさて私はどうしましょうかね？お腹もすいてないし、お酒もあまり得意ではありませんからね。そうだ、どこかの店で新しい衣装でも。すみません、このあたりに服が買える店はありますか？出来ればこんな感じの地味な服がいいのですが」

アロマ「地味だって？（笑）聞いたかい、面白い事言う人だね」

ワイン「あんたは今、この街一番のハゲ男だと思っけどね」

チーズ「あんたたち見ない顔だね。女でも探しに来たのかい？それならあたしなんかどうだい？サービスしとくよ！あははははは」

爆笑する女3人。

マリネ「あーもういいです。ありがとうございました。ふー、さてどうしましょうかね・・・」

そこに少女と少年の二人連れが通りかかる。

マリネ「あ、もしもしお嬢さん、ちょっと聞きたいのですが、服を売ってる店はどっちに行けばいいんですかね？」

無言で指さすティピ。

マリネ「あ、あっち。どうもありがとうございます」

行こうとするティピ。

するともう一人の少年が座り込んでマリネの絵を描き始める。

ティピ「マルコ、よしなさい。失礼よ」

マルコ「だって面白い顔してるんだもん！」

ティピ「マルコ！ごめんなさい、この子好きなものを見つけると描かずにはいられない性質（たち）で。さあ絵を描くのはやめて行くわよ、サンドラが待ってる」

マルコ「待って、もう少しだけ」

ティピ「駄目よマルコ・・・駄目ったら駄目！」

マルコ「ふえーん（泣）」

マリネ「あ、いいですよ、私は。どうせ暇なんですから」

ティピ「でも」

マリネ「かまいません、気に入ってもらったなら光栄です。ピエロ冥利に尽きますよ」

ティピ「ピエロ！？あなたピエロなの！？」

マリネ「はい、この涙のメイクがピエロの証。正真正銘、ピエロのマリネと申します、どうぞお見知りおきを」

マルコ「わー、すごいや！ピエロなんて初めて見た」

マリネ「それはそれは。でもお家で誰か待っているんですよね？心配されるといけません。さ、早くおかえりなさい。アデイオス、またお会いしましょう」

マルコ「やだやだ！ねえ、店においでよ。サンドラも喜ぶはずだよ」

マリネ「お店？なんのお店をやってらっしゃるんですか？サンドラさんっていつたい？」

ティピ「マルコ、ご迷惑よ・・・診療所です。体の痛みを取ったり、疲れを癒したりする治療院をやっていきます。サンドラはその先生で、私は助手をしています。マルコは私の弟です」

マリネ「へー。そういえば長旅が続いて体が疲れてますね。どうでしょう？よかったら、あなたたちの診療所に連れて行ってはくれませんか？」

マルコ「本当に！？やった！」

ティピ「そういうことならかまいませんが」

マリネ「良かった、グラッチェ！それでは参りましょう、ご案内ください、えーと」

ティピ「ティピです」

マリネ「ティピ、良い名ですね」

マルコ「行こう、ピエロさん！」

マリネの手を引いて走り出すマルコ。

マリネ「ややや、待ってください（笑）、ほらほら行きますから、そんなにひっ

ばらないで」

マルコ「早く早く（笑）」

マリネ「（笑）」

帰っていくティピ。

その様子を隠れてみていた、妖しい人影（ノエル司祭の一行）。

サンドラの治療院。

ティピ「ただいま！サンドラ、お客様よ」

マリネ「へえ、すてきなお店ですね」

サンドラが来る。

サンドラ「いらっしやいませ。あら？旅の方？」

マリネ「はい、良くお分かりですね。ピエロのマリネと申します」

サンドラ「旅の疲れが出ているようですから。それに、お見かけしないお顔なので。どうぞ、お座りになって」

マルコ「すごいだろ？サンドラはその人を見ただけで全部わかつちやうんだ」

マリネ「それは怖いですね。悪い考えも全部見られてしまう」

サンドラ「大丈夫ですよ。見ようとしなければ見えませんから。今日はどうしますか？」

マリネ「ではせっかくなので、疲労回復でもお願いしましょうかね」

サンドラ「分かりました。軽く目を閉じてください」

マリネ「はい、こうですかね」

サンドラ「ゆっくり息を吸って・・・吐いて・・・では始めていきますね」

マリネ「お願いします」

背中や頭など、手をかざしていくサンドラ。

サンドラ「マティマティートロ、パニパニモーロ、アクイツサメロニーサ・・・」

しばらくして治療が終わる。

サンドラ「はい、目を開けてください。いかがですか？」

マリネ「・・・わあ、とても体が楽になりました。すごい、まるで生まれ変わ

ったようです」

マルコ「ね？すごいだろ？サンドラは魔法使いなんだ」

マリネ「魔法使い？」

ティピ「マルコ、治療の邪魔よ」

マルコ「はい」

マリネ「そういえば、なにか呪文のようなものを唱えていましたね？」

サンドラ「私の産まれた村に古くから伝わるおまじないのようなものです。冗談ですよ、魔法使いだなんて。マルコったら」

マリネ「ほほほ。可愛いですねえ、弟さんですか？」

サンドラ「いえ・・・親を失くして路頭に迷っていたのを引き取ったんです。少し前まで橋の下で暮らしていたんですよ、二人きりで」

マリネ「そうだったんですね・・・」

サンドラ「でも今では本当の家族のようです。私も一人きりだったので、とても助かっています。毎日、笑っていられることが嬉しくって」

マリネ「良かったですね。二人にとっても、あなたにとっても」

サンドラ「はい」

マリネ「あ、御代を」

サンドラ「ありがとうございます。700バロンです」

マリネ「じゃあこれで。おつりはいいです」

サンドラ「え、でも」

マリネ「二人にお菓子でも買ってあげてください」

サンドラ「ありがとうございます、マリネさん」

そこに男性客二人が入ってくる。

サンドラ「いらっしやいませ」

ティピ「いらっしやいませ！あ」

パンチ「やあ、ティピ、また来たよ」

マルコ「いらっしやい！パンチさん、チョップさん」

チョップ「こんにちは、マルコ。この間診てもらった後、しばらく調子がよくな。ね？」

パンチ「ああ。船の荷役仕事は体がきついからね。今日も頼むよ」

マリネ「あれれ？あなたたち、たしか・・・」

パンチ「わ！マリネじゃないか！？どうしてここに？」

マリネ「ちよつと探し物をしていまして、たまたまこの港街にたどり着いたんです」

チョップ「バンジーたちとか？」

マリネ「はい。スカイやアボカドも一緒です。あなたたちは？」

パンチ「ここが俺達の故郷なんだよ」

マリネ「ああ！ここで悪事から足を洗って真っ当に生きて行こうと」

チョップ「ちよ、ちよ、ちよつと、ちよつと・・・（声をひそめて）マリネ！俺たちが牢獄に入っていたのは内緒なんだよ！」

マリネ「まあ、そうでしたか」

パンチ「だから俺たちとどこであったかは、上手いことごまかしてくれよ！な、この通り」

マリネ「わかりました、お安いで用です」

サンドラ「3人はお友達なんですか？」

パンチ「まあ、そんなところだ」

サンドラ「どこで出会ったんですか？パンチさんとチョップさんは数年ぶりの里帰りなんでしょ？」

チョップ「ああ、そうだよ。上手くやれよ」

マリネ「えーと、あれです、あそこ、そうそう！サーカスです」

パンチ・チョップ「サーカス！？」

パンチ「なんでよりによってサーカスなんだ？」

チョップ「もつと無難なのがあるだろう？」

マリネ「だって私が働いてそうなどころは限られますよ」

マルコ「すごい！サーカスって空中ブランコとか、猛獣使いとか、人間ロケットとかやるところでしょ？」

パンチ「そうだよ、マルコ。よく知ってるね」

マルコ「うん、昔。パ。パが連れて行ってくれたんだ。ママも姉ちゃんもみんな、ね？」

ティピ「そうね。楽しかったわね」

サンドラ「マリネさんは分かるけど、お二人は何を？」

チョップ「え？あ、俺たちは、その、なんだ」

マリネ「バンドです、バンド！ショーを盛り上げる演奏を担当しましたね？」

パンチ「馬鹿！演奏なんかしたこと・・・」

ティピ「どうしたの？」

パンチ「あー、そうだそうだ、そうだった！」

ティピ「演奏なんて素敵だわ。楽器は？」

パンチ「楽器？えーと俺は・・・ベースだ！ブンブンブンブンてね」

チョップ「俺は・・・サックス！バンドの花形さ」

マルコ「すごいすごい！何かやってよ！」

チョップ「あははは、楽器があればな」

マリネ「そんなものいりませんよ！」

M 6 サークラスにおいて

楽しそうに笑うサンドラたち。

マリネ「それじゃあ私はそろそろ宿に戻りますね」

パンチ「あ、そうか。また会えるだろう？」

マリネ「はい。少なくとももうしばらくはこの姿です。上手くいけば」

サンドラ「上手くいけば？」

マリネ「あ、こっちの話です」

ティピ「また来てくれる？マリネさん」

マリネ「来ますよ。毎日来ます」

マルコ「本当！？」

マリネ「はい。また一緒に遊びましょう」

ティピ「約束よ」

マリネ「約束です」

マリネが帰ろうとすると、ノエル司祭一行が入ってくる。

ノエル「サンドラという女はいるか？」

サンドラ「はい、私ですけど」

マルコ「誰だよ？お前ら」

ティピ「マルコ、こっちへ来なさい」

ノエル「傷や痛みを直す診療所だと聞いたが、本当か？」

サンドラ「はい、その通りです」

パンチ「なんだい？あんたもどこか痛みでもあるのかい？」

チョップ「それならここは間違いない。どんな痛みも疲れも、サンドラにかかれば、たちどころに消えちまう」

マルコ「そうだよ、サンドラはすごいんだから！」

ノエル「それはそれは聞きしに勝る、奇妙な力だな。いや、それとも良からぬ力かな？」

ティピ「良からぬ力？違います、サンドラは、サンドラは！」

サンドラ「ティピ、おやめなさい」

ノエル「妙な噂が届いてね。港町プンタアヒージョに、手をかざすだけで病人、怪我人を直してしまう女がいると」

ティピ「サンドラの手は神の手です！良からぬ力だなんて、そんなんじやあり

ません！」

マリネ「ティピ・・・」

ノエル「神の手？ははは・・・あはははは！神の手だと！？それこそが妖しいじゃないか！何もせずに病を治すなど、私に言わせれば神の力どころか、魔女の所業だ」

パンチ「魔女の所業？なんだってそんな」

ノエル「君たちは？ただの客なら、教会の仕事に口を挟まぬ方が身のためだ」

チョップ「教会？ってまさか、あんた・・・魔女狩りのノエル司祭じゃ？」

マリネ「ノエル司祭？」

ノエル「いかにも。今日は顔を見に來ただけだ。サンドラ、調べが終わるまでどこにも行かぬよう。また来る」

出ていくノエル一行。

マリネ「魔女狩りのノエル司祭っていったい？」

チョップ「ああ・・・まずいことになったな」

マリネ「何がまずいんですか？ねえ、チョップさん、パンチさん！？」

パンチ「魔女狩りのことは知っているだろう？」

マリネ「はい、聞いています。パロネック教会が魔女を探し出し、火あぶりにしているとか」

チョップ「そのとおり。聞いたところじゃ、魔女かどうかも分からないまま、大勢の女たちが殺されているらしいんだ」

マリネ「そんな・・・それとサンドラが何の関係があるんですか？」

パンチ「おそろく・・・」

マリネ「おそろく、なんですか？」

チョップ「サンドラは魔女と疑われてるようだ」

ティピ「なんですって！？」

マルコ「ふざけやがって！おいらが行ってぶっとばしてやる！」

サンドラ「マルコ、やめなさい」

マルコ「でも・・・」

サンドラ「私は大丈夫。きつとすぐ間違いだってわかるわ。心配しないで」

マルコ「本当？本当に大丈夫？」

サンドラ「ええ」

パンチ「そうだな、サンドラが魔女なわけはないんだし、心配することないか」
チョップ「おう、その通りだ。そのうち奴らも謝ってくるだろう。わはははは」

パンチ「おっと、約束を思い出した、今日はこれで帰るよ」

ティピ「あ、でも治療がまだ」
パンチ「いや、また今度、わるいなサンドラ。おい、行くぞ」
チョップ「え、俺も？・・・あ、ああ、そうだな、そうだった、わるいわるい、また近いうちに。じゃ」

そそくさと帰っていくパンチとチョップ。

マルコ「変なの」

マリネ「大丈夫ですか？サンドラさん」

サンドラ「はい・・・」

ティピ「・・・」

◆第六節

宿。

バンジー「なるほど、魔女狩りか」

スカイ「魔女を探す俺たちと、魔女狩りの司祭が同じ港町にたどりついた。これはただの偶然ですかね？」

バンジー「どうかな」

マリネ「サンドラさんは幼い孤児の兄弟を引き取って面倒みている、とても優しい女性です。なにか力になってあげられればいいのですが」

ダンス「あら？マリネ、あんたさては、惚れたわね？そのサンドラって女の人に」

マリネ「ば！違います！そんなじゃありません、そんなんじゃ・・・ピエロは人を愛したりしませんから」

ダンス「あら？そうなの？どうして」

マリネ「どうしてって・・・ピエロが人を愛してしまったら・・・幸せになっちゃったら、もうピエロではないのです。ピエロの頬には常に、涙が無くてはなりませんからね」

ダンス「ふーん」

バンジー「そんなことより、どうする？期限はあと4日だ。白魔女を探す手立ては何かないか？」

アボカド「おいら思うんだけど、そのノエルって魔女狩りの親分を尾行するっていうのはどう？そいつはきつと、魔女の噂をたくさん持つてるから、他にも色々行くんじゃないかな？魔女の疑いがある人のところへさ」

バンジー「おー！名案だな！どうしたんだ、アボカド？お前らしくもない」

スカイ「昼間なに食ったんだ？青魚か？青魚食うと頭良くなるって言うからな」

ダンス「すごいじゃない、スナメリちゃん！見直しちゃった、はい、ご褒美のチュ」

アボカド「いい、いい！おいら化粧の匂い嫌いなもの」

ダンス「ま、私、そんなに厚化粧じゃないわよ！？」

アボカド「やめて、やめて！」

ダンス「ほら、ほら、これでどう？どうなの？」

じゃれあう二人。

バンジー「そういえば、ギラギラは？」

ダンス「そういえば遅いわね」

スカイ「ほっとけ、あんなやつ」

バンジー「そうもいかないだろ？アボカド、ちょっと見てこい」

アボカド「えー！やだよだ、人使い荒すぎる！」

バンジー「飯抜き！」

アボカド「ひー！」

マリネ「あの、私は」

バンジー「どうした？マリネ」

マリネ「明日なんですけど・・・私は同行しなくてもいいですか？」

スカイ「なんで？」

マリネ「あの、その・・・心配なのでサンドラさんの店に様子を見に行きたいのですが」

ダンス「ほら」

マリネ「・・・」

バンジー「わかった、いいぜ」

マリネ「ありがとうございます」

ギラギラが戻ってくる。

バンジー「お、ギラギラ、遅かったじゃないか？何かわかったか？」

ギラギラ「当たり前です。私を誰だと思ってるのですか？」

みんな「うそつきクソ野郎！」

ギラギラ「つぐ・・・」

サンドラの店。

マリネがティピとマルコと遊んでいる。それを嬉しそうに見ているサンドラ。

マリネ「はー、疲れました。少し休ませてください」

マルコ「やだ！もっと遊びたい」

サンドラ「マルコ、マリネさんかわいそうよ」

マリネ「じゃあ、あと少しだけですよ。そうしたら休みましょう」

マルコ「やった！」

ティピ「マリネさん、港に行ってみない？昨日遅く、すごく大きな船が到着したんですって」

マリネ「へー、面白そうですね。見に行ってみましょう！」

マルコ「行こう行こう！サンドラ、マリネさんと港に行ってもいい？」

サンドラ「いいのかしら？マリネさん」

マリネ「私はどうせ暇ですから」

サンドラ「それじゃマリネさんの言う事良く聞くのよ。すみません、お願いします」

マリネ「はいはい、喜んで。行きましょう」

マルコ「行ってきまーす！」

ティピ「サンドラ、行ってきます！」

サンドラ「行ってらっしゃい」

出ていく三人。

そこに常連のアロマたちがやってくる。

サンドラ「いらっしやいませ」

アロマ「こんにちは、サンドラ」

サンドラ「こんにちは、アロマさん」

ワイン「サンドラ、今日もお願いね。ここのところ忙しくて腰がつかいのよ」

サンドラ「分かりました、ワインさん。ただどお店が繁盛ならいいじゃないですか」

マルゲリータ「それより、いま出て行ったの？旅の人よね？」

サンドラ「はい。マルゲリータさん、マリネさんを知ってるんですか？」

マルゲリータ「マリネって言うの。だけどいいの？子供達と遊ばせたりして」

ワイン「そうよ、どこの馬の骨かもわからないんだから、油断しちゃ駄目よ」

サンドラ「いえ、マリネさんは」

アロマ「サンドラ、余計なお世話かもしれないけど、変な噂を耳にしたのよ」

サンドラ「変な噂？」

アロマ「脱獄した海賊がこの街に来たって話、聞いてない？」

サンドラ「いいえ」

ワイン「パンチとチョップ知ってるでしょ？」

サンドラ「はい。最近、戻ってきたんですよね？この街に」

マルゲリータ「それがどうやら、同じ牢屋に入れられていて、脱獄してきたらしいのよ」

アロマ「それで仲間をこの街に引き寄せたらしいって」

サンドラ「・・・たしかに、3人は以前から知り合いだったらいいですけど」

アロマ「ほら！」

ワイン「悪い事言わないから、付き合いもほどほどにしておいたら？」

マルゲリータ「間違いがあつてからじゃ遅いわよ」

アロマ「あなたのためを思って言ってるのよ、分かるでしょ？」

サンドラ「・・・はい」

そこにガヤガヤと帰ってくるマリネたち。

マリネ「いやあ、すごかったですね」

ティピ「ね、言ったとおりでしょ！？なんでも隣の国の王子様が来訪されてるんですって」

マリネ「へー、それで」

マルコ「サンドラ、すごいんだよ！300人も乗れる船でね、マストなんてこーんなに」

サンドラ「マルコ、お客様よ」

マルコ「あ、ごめんなさい」

アロマ「あ、今日は私はこれで。サンドラ、ごめんなさい、また来るわ」

サンドラ「あ」

ワイン「明日の仕入れ忘れてたわ。サンドラ、またね」

マルゲリータ「夜は戸締りしっかりね。アディオス」

サンドラ「ありがとうございます・・・」

そこに一人の男が入ってくる。

サンドラ「いらっしやいませ」

クラレンス「おじやまします」

サンドラ「ティピ、奥の部屋へ」

ティピ「はい、サンドラ」

奥に消えるティピ達。

サンドラ「いらっしやいませ、始めてですね。お怪我ですか？それともどこかおつらいところがおありですか？」

クラレンス「はあ。こういうところは初めてで。ここは病院ですか？」

サンドラ「いえ、疲れを取ったり、軽い怪我を直したりして差し上げる治療院です」

クラレンス「すみません、なんとなく雰囲気にはかかれて入って来てしまいました。じゃあ、せっかくだから、診てください」

サンドラ「はい。じゃあ、こちらに座って。では目を閉じてください。深く息を吸って・・・吐いて」

クラレンス「吸って・・・吐いて・・・」

サンドラ「だいぶお疲れのようですね」

クラレンス「わかりますか？」

サンドラ「ええ・・・とても悩まれているようですね」

クラレンス「おどろいたな・・・なんで悩んでいるかは分かりますか？」

サンドラ「・・・ご自分の立場と、ご自分の夢に挟まれて、お悩みのようなね」

クラレンス「すごい、そんなことも分かるんですか？あなた、何者ですか？」

サンドラ「ほら、目を閉じて」

クラレンス「あ、すみません」

サンドラ「私はただの街の小さな治療師です」

クラレンス「それだけ？だって、もうすでに体が楽になってきましたよ。触っていませんよね？それにまるで人の心が見えるようだ」

サンドラ「小さい頃から、なぜか分かってしまうんです。その人に集中すると、気持ちとか悩みとか、体の悪い部分とか。最近はコントロール出来るようになりましたけど、昔はとても苦労しました」

クラレンス「それはそうでしょうね。休むことなく他人の色んなことを感じたり見えたりしていたら。私だったら頭がおかしくなってしまうでしょう」

サンドラ「祖母からは人に話すなって言われていました。人と違った能力は、不幸を呼ぶからって。望んだわけでもないのに、どうして私がつて。運命をずいぶん恨みました」

クラレンス「お気持ちわかりますよ。自分ではどうしようもない境遇。あらがいのような宿命。だけど、あなたは今はこうして、その力をプラスに変えることが出来た。素晴らしいことですね」

サンドラ「ありがとうございます。やだ、私ったら、会ったばかりの人にこんな話。すみません」

クラレンス「かまいません。私も話せて良かった。それに体も、すっかり楽になりました。どうもありがとうございます」

サンドラ「いいえ、こちらこそ、ありがとうございます」

そこにお供を引き連れて現れるクラレンスの妹のナターシャ王女。

ナターシャ「お兄様！こんなところにいらしたの？みんな探してますわよ。なに？ここ・・・薄汚い店ね」

クラレンス「ナターシャ、失礼だろ」

ナターシャ「ふん。そんなことより早く行きましょう。式典の前に色々準備が
おありでしょ？」

クラレンス「わかった、すぐ行く。ではお勘定を」

金貨を床に投げてよこすナターシャ。

ナターシャ「早く拾いなさいよ」

サンドラ「・・・」

ナターシャ「お兄様、早くね。先に行くわよ」

出ていくナターシャ。

ゆっくり金貨を拾い、土を払い、サンドラに差し出すクラレンス。

クラレンス「すみません・・・」

様子を見ていたマリネたちが出て来る。

二人の間に割り込み、金貨を突き返すティピ。

ティピ「いりません」

クラレンス「しかし・・・」

ティピ「いりません！・・・帰ってください・・・帰って！」

クラレンス「・・・」

出ていくクラレンス。

悔し泣きをこらえて奥に消えるティピ。

夜の港。一人たたずむクラレンス。

急患の往診帰りのサンドラが通りかかる。

サンドラ「・・・こんばんは」

クラレンス「・・・やあ、サンドラさんでしたね・・・昼間は妹が失礼なことを・・・本当に申し訳ありませんでした」

サンドラ「いいえ、大丈夫です。それより、こんな時間にこんな所で何をされてるんですか？」

クラレンス「いえ、別に・・・あなたこそ、どうしたんですか？」

サンドラ「急に具合が悪くなったおじいちゃんがいて、往診の帰りです」

クラレンス「そうですか。街の皆さんはきつとずいぶんサンドラさんを頼りにしてるんでしょうね」

サンドラ「わかりませんが、精一杯つとめたいとは思っています。この街は私を救ってくれたから」

クラレンス「救ってくれた？この街が？」

サンドラ「はい。私、この街の生まれではないんです。色んなところを転々として、やっとこの街に落ち着きました。良い人ばかりだし、自由だし」

クラレンス「自由か・・・うらやましいな・・・私には一切自由なんてないから」

サンドラ「自由が無い？」

クラレンス「はい。見えないロープで体も心もぐるぐるに縛られて、がんじがらめです」

サンドラ「・・・」

クラレンス「・・・逃げ出したいなと思って」

サンドラ「逃げる？」

クラレンス「ええ。全てを捨てて、その船で誰も知らない間に遠くへ行ってしまうえば、新しい人生を歩めないかな・・・なんて、夢みたいなことを考えてました」

サンドラ「素敵ですね。そんなことが出来るなら。私も行きたいです、遠い世界に」

クラレンス「行ってしまいましたでしょうか！？このまま船を盗んで。船主には申し訳ないが、後からお詫びを送りましょう。そうだな、食料は10日分積みましょう。10日も経てばきつとどこかの港につけるはずですよ。そこでまた補給をしたら、今度は半月ノンストップで地球の裏まで行って、そうすればきつと、・・・きつと・・・夢ですかね・・・」

サンドラ「夢ですよね・・・患者さんもいるし、なにより家族を置いていくわけにはいきませんもの」

クラレンス「あの子たちですか？」

サンドラ「ええ。あの子たちだけが、私の家族です。何があっても守りたい。何があっても」

クラレンス「守れますよ。あなたならきつと」

サンドラ「はい」

二人を影から見ていたマリネ。そしてノエルもまた、見ていた。

◆第七節

クラレンス王子来訪を祝う祭。

賑やかな街。楽しそうに行き交う街の人たち。

M7 パレードがやってきた

マルコ「こっち、こっち、ここなら良く見えるよ」

サンドラ「マルコ、勝手にいかないで」

ティピ「迷子になるわよ」

マリネ「それにしても、あんな大きな船に乗ってくるなんて、いったいどんな人なんでしょうね？クラレンス王子という方は」

町長が出てきて、口上を述べ始める。

町長「さあさあみなさん、お楽しみのところ失礼いたします。私、プンタアヒージョ町長のキヤメルと申します。本日はお天気も良く、最高のお祭り日和となりました。今日の祭りはほかでもない、隣国の王族、クラレンス王子とナターシャ王女がご来訪いただいた記念式典でございます。これからお二人が皆さんの前にお顔を見せていただけると言う事で、下がって下がって、決してお手を振れたりすることない様、拍手でお迎えください！・・・それではお待ちせいたしました！クラレンス王子、ナターシャ王女、ご登場です！」

響きわたるファンファーレ。

ティピ「来たわよ！」

家来を従がえて歩いてくるクラレンス王子とナターシャ王女。

サンドラ「あ・・・」

マルコ「あいつら昨日の！」

マリネ「し！マルコ」

王子たちのうしろにはノエル司祭の姿。

マリネ「ノエル司祭！？なぜやつが」

そこにパンチとチョップが来る。

パンチ「マリネ！マリネ、こっちだ」

マリネ「パンチ？」

手招きするパンチ。

マリネ「どうしたんですか？」

パンチ「マリネ、いつまでサンドラたちと一緒にいるつもりだ？」

マリネ「え？」

チョップ「このままじゃまずいことになるぞ。見てみる、ノエルだ」

マリネ「はい、それは気が付いていましたが・それが何か？」

パンチ「ノエルのやつ、今日、この祭りで魔女狩りをするつもりらしい」

マリネ「なんですって？」

チョップ「王子たちを見てみる。あの王子たちの国は、魔女狩りを奨励しているパロネック教中心の国だ。魔女を見つけた物には賞金を出したりもしている」
チョップ「糸を引いてるのはパロネック教会だ。どうやら来訪を祝う祭りを開かせて人々を集め、大勢の前で魔女狩りをやって、教会の力を見せつけたいらしい」

パンチ「この辺りは昔からある古代ギリシャ神話の多神教が根強いからな。要は布教のためだろう」

マリネ「魔女狩りって、まさか、サンドラを！？」

ノエル「プンタアヒージョのみなさん、お邪魔致します。私はパロネック教会司祭のノエルと申します。たくさんの方々のご歓迎を受けて、クラレンス王子、ナターシャ王女、大変喜んでおいでです。誠にありがとうございます。しかしながら、お二人がこの街にご来訪されたのは、このような祭りの為だけではございません。お二人にはもうひとつ、とても大事な使命がございます。それはこの街から魔女を駆逐すると言うお役目です！」

ざわつく街の人々。

ノエル「この街は今、魔女に支配されようとしています！皆さんの隣に、何食わぬ顔をして暮らす恐ろしい魔女が潜んでいるのです！魔女はその時を狙っています！みなさんが油断し、信仰を忘れ、快樂に身をゆだね墮落するその時を！その瞬間、魔女は猛威を振るい、疫病が蔓延し、飢えは人々を苦しめ、奪い合い、殺し合い、この街の息の根を止めることになるでしょう！」

静まり返る街。

ノエル「それを阻止するために、お二人は来た。そして、神の僕である私は見付けました。この街に潜む、魔女を！」

ざわつく街の人々。

ノエル「あの女を捕えろ！」

ノエルの部下たちがサンドラを拘束する。

マルコ「やめろ！やめろよ！サンドラ！」

ティピ「お願いです！サンドラは魔女なんかじゃない！やめて！手を離して！」

マリネ「何するんですか！？やめなさい！・・・やめろ！」

抵抗するマリネたち。

クラレンス「あれは！ノエル、やめさせろ！彼女は関係ない！」

ノエル「なに関係ないのでか？我々は長い間あの女を見張っていたのですよ。あの女は手をかざすだけで人々の病を治してしまう。さらに調べたところ、女の祖母も同じような奇妙な力を持っていたことが分かりました。間違いなく、あの女は魔女です」

ナターシャ「いいじゃない、お兄様、あの女が魔女だろうとなかろうと。たかが下層階級の女が一人、火あぶりにされたところでどうってことないわよ。それに、魔女狩りの邪魔なんてしたら、お父様がなんていうかしらね？フツ」

ノエル「あなたがた王族の豊かな暮らしは、我々教会によって守られていることをお忘れなき様。船に連行しろ！」

クラレンス「待て！ノエル！話を聞け！」

ノエル「かまわん、王子もお連れしろ！行くぞ！」

捕えられ連行されるサンドラ。連れて行かれる王子。

マリネ「サンドラー！」

サンドラの診療所。

バンジーたちがいる。そこに力なく戻ってくるマリネたち。

マリネ「バンジー・・・どうしてここに・・・」

バンジー「見てたぜ、祭の騒ぎ」

マリネ「見てた？」

スカイ「大丈夫か？」

マリネ「見ていてなぜ助けてくれなかったのですか？」

ギラギラ「ノエルを3日間尾行してみました、結局、ノエルが訪れた場所はここだけでした。つまり、奴は最初からサンドラだけを狙っていた」

ダンス「教会は、彼女が魔女がどうかではなく、魔女が必要なよ。生贄として」

スカイ「体に触れず病人を直したりするなんて、魔女にはうってつけだからな」

バンジー「だけど、やっぱりそれって不思議だろ？だから、お前には悪いとは思ったんだけど、探しに来たんだ」

マリネ「何をですか？」

アボカド「・・・床下から、見つけちゃった」

バンジー「魔女の宝箱だ」

マリネ「・・・うそ」

ダンス「本物よ」

アボカド「タコにならずには、済むのかな、ははは・・・」

マリネ「そんな・・・彼女が魔女だなんて・・・そんなのウソだ！そんなこと・・・あるわけありません！」

バンジー「お前の気持ちはわかるが」

マリネ「わかりません！・・・わかるわけない・・・わかるわけがないでしょう！」

スカイ「マリネ・・・」

マリネ「私はピエロです・・・人を愛してはいけないピエロです・・・それでも、どうしても・・・愛することは出来なくても、守ることは出来たはずです！・・・それなのに、私は彼女を守ることが出来なかった・・・捕まって連れて行かれるサンドラを守ってやることだ出来なかつたんです！・・・だから、そんな、そんな弱虫の私の気持なんか、喧嘩の強いバンジーさんに分かりっこない！」

マリネの頬を打つバンジー。

バンジー「甘ったれんな」

ダンス「バンジー」

バンジー「ピエロがなんだ。弱虫がなんだ。おまえはそうやってずっと、ピエロってものに隠れて、ごまかして、逃げて来ただけなんだよ。本気で守りたいなら、命がけでいけ。全部捨てろ。そのうえで彼女が本当に魔女だったとした

ら・・・みんな、あきらめようぜ。豚でもゴキブリでもなつてやろうじゃねえの。な？」

スカイ「仕方ねえか、ま、楽しい人生だったかな（笑）」

ダンス「そうね、好き勝手やってきて、最後は・・・ゴキブリかあ」

アボカド「おいらもいいよ、マリネが好きなようにすれば」

ギラギラ「元はと言えば、私の私利私欲のために・・・本当になんとお詫びしてよいか・・・」

バンジー「本当だ、てめえだけは」

ギラギラ「・・・」

バンジー「でも、もういいよ。仲間のために死ぬるなら、海賊家業も悪くないさ」

スカイ「仲間の為か・・・くすぐったいすね」

ダンス「ところでバンジー、あなたが絶対なりたくない生き物ってなによ？」

アボカド「ああ、そうだ、聞いてなかったね」

バンジー「俺か？俺はな・・・」

◆第八節

クラレンスの船。

ナターシャ「早いところやりましょうよ、火炙り」

ノエル「お待ちください、ナターシャ王女。処刑は新月の夜に行なうのが仕来り」

ナターシャ「新月？新月っていつなの？」

ノエル「明日です。明日の夜が新月です」

ナターシャ「あのサンドラとかいう女、気に入らないわ。お兄様になれなれしく近づくなんて。下層階級のくせして」

ノエル「もう少しの辛抱です。それよりもナターシャ様、国に戻った際は、私の大臣への登用をなにとぞ王様にご進言を」

ナターシャ「わかってるわよ、任せておいて。古いのよ、父上の考えはもう」

ノエル「左様ですか」

ナターシャ「これからは私が国を引っ張って行かなくては。もつと贅沢もしいし、税金もどんどん取らないとね？そうでしょ？ノエル大臣。ほほほほ」

ノエル「おっしゃる通りです」

ナターシャ「女を処刑したら、お兄様も少しは目が覚めるでしょ」

牢。囚われの身のサンドラ。クラレンスが来る。

クラレンス「すまない、サンドラ」

サンドラ「あなたのせいじゃないわ。でも驚いた。あなたが王子だったなんて」
クラレンス「黙っててすまない」

サンドラ「でも、なぜ店に？」

クラレンス「久しぶりに他国に来て、王子としてではなく、私自身として街を歩いてみたかった」

サンドラ「東の間の自由ね・・・」

クラレンス「僕の国は今、あのノエルたちの教会に支配されているんだ」

サンドラ「パロネック教会」

クラレンス「ああ。だけど、君のことは必ず私が助ける。魔女狩りなんて、決してさせない」

サンドラ「おばあちやまも」

クラレンス「え？」

サンドラ「私のおばあちやまも、教会に連れ去られたの」

クラレンス「君のお婆さまが？」

サンドラ「ええ。私の不思議な力は祖母譲りなの。おばあちやまも村の人たちをいつも治療していたわ。内緒でね」

クラレンス「やはり、魔女狩りのせい？」

サンドラ「そうよ。村の人たちのことは信じていたけれど、やはりどこからか噂が漏れてしまったのね。ある日、パロネック教会の神父たちが家に来た。そして・・・おばあちやまを連れ去ってしまったの。良からぬ力の持ち主だと言ってる」

クラレンス「良からぬ力？・・・それで、お婆さまは？」

サンドラ「(首を振る)それっきり。そのあと何年かして、私は村を出た。教会の気配が少ない場所を探しながら転々とするうちに、このプンタアヒージョにたどり着いたの。そして診療所を開いて静かに暮らしていた。でも・・・」

クラレンス「でもなんだい？」

サンドラ「いつかはこうなるような気がしていた・・・あの日と同じように・・・」

クラレンス「サンドラ・・・君を守りたい。君の店に入ったのも、偶然なんかじゃない気がするんだ。私と一緒に、あの船でどこか遠くへ行こう。もちろん、二人も一緒だ。大丈夫、ここを離れれば全て解決する。何の心配もない。みんなで逃げよう、遠い遠いどこか安全な場所へ」

サンドラ「クラレンス・・・ないわ、安全な場所など・・・どこにも」

クラレンス「・・・え？」

サンドラ「どこに行ったって、どこまで逃げたって、何も変わらない。苦しみはいつでも自分の中にあるわ。だから、私、もう逃げたくない」

クラレンス「・・・サンドラ」

M 8 見えないもの

突然、爆発の音。

船に乗り込み、戦闘を開始したバンジーたち。

クラレンス「何事だ！？」

助けに来たバンジーとマリネ。

バンジー「いたいた！あれ？あんた、王子様？」

マリネ「サンドラ！」

サンドラ「マリネさん！」

マリネ「王子・・・鍵です！サンドラを頼みます！」

クラレンス「わかった！」

サンドラを連れて逃げようとするクラレンス。

サンドラ「私はここにいる！ここで一緒に戦う！」

マリネ「駄目です！とにかく今は逃げなくちゃ！王子！」

クラレンス「ああ！」

サンドラ「離して！私は逃げない！もう逃げたくないの！」

サンドラの頬を打つマリネ。

マリネ「逃げるんじゃない！戦うために生きるんだ！」

サンドラ「マリネさん・・・」

マリネ「頼みます、サンドラさん。ティピとマルコが待っています」

サンドラ「・・・はい」

逃げるサンドラとクラレンス。

スカイ、アボカドが来る。

スカイ「大丈夫か！？」

アボカド「ダンスとギラギラで大砲どんどん撃ってるよ」

バンジー「そうか。マリネ、いいビンタだったぜ」

マリネ「バンジーさん仕込みですからね」

バンジー「わははは！それじゃ、いっちよ、暴れちゃうか！？
みんな「OK！バンジー！」

ノエルの部下たちとの戦闘。

響く銃声。

ノエル「そこまでだ！これを見ろ」

捕えられたマルコとティピ。

ノエル「貴様は確か、サンドラの店にいたピエロだな」

マリネ「マルコ！ティピ！くそ、離せ！二人を今すぐ離せ！」

スカイ「ちくしょう、ダンス達の野郎、何してやがんだ！」

アボカド「ホエール号が乗っ取られちゃったのかな？」

ノルマ「ごちゃごちゃ言っていないで、膝をつけ！手は頭の後ろだ！早くしろ！
こいつらを撃つぞ」

バンジー「はいはい、まったくよお、役立たずが」

ゆっくり膝をつくバンジーたち。

そこにダンスとギラギラが現れる。

ダンス「ごめんね、バンジー。やっぱり私、ゴキブリになるの嫌なの」

ギラギラ「重ね重ね申し訳ありません。大金を渡されて致し方なく、船を明け
渡しました」

スカイ「こんのやろう・・・今度ばかりは許さねえぞ！」

アボカド「おそるべき卑怯さだね。ちよつとは見習うべきかな、海賊として」

ノエル「こいつらに聞いたところだと、お前たちもサンドラを殺しに来たそう
じゃないか」

バンジー「まあもともとはな」

ノエル「目的を一にする者どおし、争っているのも不毛じゃないか？」

バンジー「俺の仲間はサンドラを助けたいらしいからよ。しょうがねえだろ？」

ノエル「だが白魔女を殺さなければ、お前たちは姿を変えられてしまうのだろ
う？黒魔女に」

バンジー「黒魔女を知ってるのかよ？」

ノエル「ああ、良く知っているとも。我がパロテック教会を作ったのは、黒魔女のベロニカ様だからな」

バンジー「なんだと!？」

ノエル「パロテック教会による魔女狩りも全て、白魔女を駆逐するために黒魔女側が作り出したものだ。お前たちは白魔女を良い魔女だと勘違いしているよ。だが、本当に恐ろしいのは白魔女だ。黒魔女はウィッチアイランドで密かに生き延びてきた。しかし、白魔女は人間になりすまし、街にまぎれ、何食わぬ顔で不幸を振りまくのだ。白魔女がいる限り、この世に平和は訪れない。奴らを皆殺しにして、世界を浄化する事がパロテック教会の使命なのだ。サンドラ、出てこい! いるのは分かっている。子供達が死んでもいいのか!? 出てくるんだ! 白魔女よ!」

クラレンスと共に、ゆっくり姿を現すサンドラ。

マリネ「サンドラ!」

ノエル「出たな、白魔女! ゆっくりこっちに来て!」

クラレンス「駄目だ! サンドラ!」

サンドラ「来ないで。あの子たちは私が助ける」

ナターシャが剣を持って現れる。サンドラの首に突きつける。

ナターシャ「お兄様、いい加減目を覚まして」

クラレンス「ナターシャ、お前・・・」

ナターシャ「いい? この女は魔女なのよ」

クラレンス「嘘だ! そんなわけが・・・たとえそうだとしても、私は!」

ナターシャ「ご自分の立場を考えて。お兄様は王子なのよ」

クラレンス「捨てる。すべて捨てて一人の男としてサンドラを守って」

ナターシャ「勝手なことを言わないで! サンドラを守るですって? あなたが守らなければならぬのは、国よ! 国を守り、我が王族の存続に全てを注ぐことが王子の務め。だから、この女を殺しなさい」

クラレンス「お前、なにを」

ナターシャ「魔女を殺せるのは魔女を愛した者だけ」

黒魔女ベロニカが現れる。

ベロニカ・ナターシャ「魔女を殺せるのは魔女を愛した者だけ」

ベロニカ・ナターシャ「この剣で、女の胸を一突きにして、殺すのよ。魔女は魔女を殺さない。魔女を殺せるのは魔女を愛した者だけ」

クラレンス「やめろ、そんなことが・・・出来るわけないじゃないか・・・やめろ、やめてくれ！」

マリネ「私がやる」

ノエル「何を、血迷ったか？」

マリネ「私は・・・私は、サンドラを愛している！私の手で・・・サンドラを葬る！」

ノエル「・・・いいだろう。お前の愛が本物でなければ白魔女は死なない。その時は、お前が死ぬ時だ」

ナターシャから剣を受け取り、サンドラの前に行くマリネ。

マリネ「サンドラさん・・・守ってあげられなくてごめんなさい」

サンドラ「いいの、マリネさん。こんな私でも誰かを守れるなら、命なんて惜しくはないわ。だけど信じて、私は・・・私は魔女なんかじゃない。私も、私のおばあちやまも魔女なんかじゃ・・・二人をお願いします。マリネさん、ありがとう」

マリネ「・・・」

隠し持っていた宝石箱を取り出すマリネ。

マリネ「黒魔女は、白魔女の前で宝石箱を開けてはならないと言っていました。これを開けたら、真実が分かるのかもしれない。サンドラさん、いいですか？」

うなづくサンドラ。

ノエル「何をしている！早くやれ！白魔女を殺せ！」

宝石箱を開けるマリネ。

マリネ「うわー!!!」

激しい光の渦。

白魔女に覚醒するティピ。

ティピ「アリオナテューサ、ホメロンラテューサ、アリオナテューサ、ホメロンラテューサ、バビロントアゼロン、トウワレントラメオン・・・」

ベロニカ「しまった！白魔女はあっちだったか！」
ノエル「まさか！？あんな子供が！」

吹き荒れる嵐。とどろく雷鳴。

イナズマにうたれるベロニカとノエルたち。

ベロニカ「あがつー！」

ノエル「うえあー！」

逃げるダンスとギラギラ。

ダンス「キヤー！」

バンジー「やばい、隠れろ！」

アボカド「わー！」

スカイ「マリネ！来い！マリネ！・・・チツ！」

隠れるバンジーたち。

マルコ「ティピ！？どうしたの！？ティピ！」

ティピ「ごめんね、マルコ・・・サンドラ、白魔女は私なの」

マリネ「そんな・・・ティピ！私だ、マリネだよ！？わかるだろ！？ティピ！」
ティピ「マリネさん、驚かせてごめんなさい。私は本当はティピじゃない。私の名前は、白魔女イヴ。お願い、私が完全に白魔女に戻る前に、どうか、私を殺して」

マリネ「なんだって！？そんなこと出来るはずがないだろう！？」

ティピ「お願い、今にもどんどんティピが消えてく・・・(だんだん声も変わる)、早くしろ・・・早く・・・殺せ・・・アリオナテューサ、ホメロンラテューサ、アリオナテューサ、ホメロンラテューサ、バビロントアゼロン、トウワレン
トラメオン・・・」

マリネ「ティピ！」

ティピ「はは・・・あはははははは！皆殺しだ！殺して！一人残らず血祭りにしてやる！早く！お願い！あはははははは！」

剣でティピの胸を刺すサンドラ。

マリネ「サンドラ・・・」

徐々に静かになり、サンドラの胸の中で事切れていくティピ。

マリネ「知っていたのですか？」

うなずくサンドラ。

ティピ「ありがとう、サンドラ……」

M9 やわらかい記憶

宝石箱と共に、サンドラの手の中から消えているティピ。

◆エピローグ

港。

捕えられたギラギラ。

スカイ「どうなるか、わかってるんだろ？」

アボカド「そうだ！サメの餌にしようよ。サメはね、上手く処理すればいい食材になるんだよ。かまぼこって知ってる？遠い東の果ての島の食べ物でね」

ギラギラ「やめてください！バンジーさん、私はみんなを救うために、あえて悪役を買って出たのです！信じて！お願い！」

バンジー「あはははは！別に鼻から信じちゃいけないから構わねえよ。だけど、この金は船の修理代に消えちゃうから」

ギラギラ「え、それは！あの……とほほほ」

パンチとチョップが来る。

バンジー「ほらよ、パンチ。修理代だ。助かったぜ」

パンチ「行くのか？」

バンジー「ああ、この街は俺たちには平和すぎらあ」

チョップ「元気だな」

バンジー「お前らもな」

アロマたちがたくさんの荷物を抱えてやってくる。

アロマ「いたいた、ほら、これ、持っておいき」

アボカド「わあ！こんなにたくさん、いいの？」

ワイン「饞別よ！達者でね、イルカちゃん」

アボカド「スナメリ！じゃない、アボカド！」

みんな笑う。

マルゲリータ「サンドラは？」

サンドラが来る。

マリネ「サンドラ・・・マルコは？」

サンドラ「(首を振る)・・・あの子に本当は姉なんかいなかったの。マルコの心の寂しさの隙間に白魔女が入り込んだ。何も覚えていないのに、喪失感だけが彼に残された。私は・・・私は間違っていたのかな？マリネさん・・・」

マリネ「そんなことはないですよ。ティピはいました。だって、私たちはティピが大好きだったじゃないですか」

サンドラ「・・・ありがとう・・・マリネさん」

あわてた様子のダンスが来る。

ダンス「バンジー、大変！大変よ！」

スカイ「あ、てめー、どこにいやがった!？」

ダンス「うるさい！ねえ、バンジー、すごい話聞いちゃったのよ！」

アボカド「裏切ったくせにあんたすごいな!？」

スカイ「今回ばかりはお人よしのバンジー船長も、堪忍袋の緒が切れちゃいましたよね？」

バンジー「ん？ああ、もちろんだ」

ダンス「そんなあく、すごい情報なのに、聞きたくないの？」

バンジー「なに？・・・言うだけ言ってみろ、話だけは聞いてやる」

ダンス「いやーん、いじわるく。許してくれるなら教えちゃうんだけどなあ」

スカイ「許すわけないだろう!？みんな死ぬとこだったんだぞ!？ねえ?」

ダンス「お詫びは海の上でするからあく、ね?いいでしょ?バン・ジー♡」

バンジー「ん?んく・・・」

アボカド「あ、ありゃ、駄目だな」

スカイ「またかよ・・・いい加減に」

バンジー「で?なんなんだよ?情報って」

ダンス「急に素に戻って）それがね、東の果ての小さな島に、マルコポーロが隠したとされる黄金のマリア像があるらしいの」

アボカド「東の果ての島！？」

スカイ「黄金のマリア像！？」

ギラギラ「それは下手したら世界一大きな金の塊かもしれませんね」

バンジー「そうと聞いたらだまっつてられねえな！行くか！？」

スカイ「今度こそ！」

ダンス「お宝を手に入れて」

アボカド「お腹いっぱい食べよまくろう！」

ずっこけるバンジーたち。

バンジー「マリネ、残ってもいいんだぜ」

マリネ「・・・いいえ、私は一生旅を続けます。私は旅芸人、ピエロのマリネですから！」

バンジー「よっしゃ！それじゃ、出航の準備だ！いくぜ、東の果てまで黄金のマリア像目指して！」

みんな「OK！バンジー！」

M10 海賊バンジーのテーマ

船を出すバンジーたち。

手を振るサンドラたち。

マルコが走ってくる。

マルコ「マリネさーん！さようならー！さようならー！」

マルコに気付くマリネ。

マリネ「マルコー！元気でー！元気でいてくださーい！」

いつまでも手を振るマリネとマルコ。

海原に行くホエール号。

夕日が沈んでゆく。

ダンス「そういえば、あなたが絶対になりたくない生き物って、いったい何なのよ？」

スカイ「そうだ、教えてくださいよ」

アボカド「知りたい、知りたい」

バンジー「俺か？俺はな・・・」

おしまい